一度だけの大イチョウ

二村文人

教室で『徒然草』を読んでいて、「能をつかんとする人」（百五十段）から脱線して、名人と上手はどう違うかというところへ話が及んだとき、昔落語で聴いた〝名人は上手の坂をひとのぼり〟というフレーズを説明し、さて何を例に引いたものかと思いながら、とっさに大鵬と柏戸のことが頭に浮かんだ。取り口は面白くなくてもけっして負けない大鵬は名人、好不調の波が大きいけれども、強い時にはとてつもない力を発揮する柏戸は上手。しかし、現役の学生達は最早柏鵬を知らない。桂文楽と古今亭志ん生、大山康晴と升田幸三、王と長嶋……どれも通じない。果たして、現代に名人・上手というライバルの関係はなくなってしまったのだろうか。

○

私が野球を覚えたのは大分あとになってのことだが、相撲はかなり小さい時から観ていた。戦後の生まれだから双葉山は知らないが、栃若時代には間に合った。まだ家にテレビのなかった頃も、夕方になるとラジオにかじりついていた。検査役のつもりになってテレビの前に座り、星取表をつける。行司が好きで、名前は勿論、一人一人の癖も覚えていたから、卓球のラケットを軍配に見立ててする行司の真似が得意だった。今の木村庄之助が玉治郎といって幕尻にいたのを記憶している。

力士では若秩父のファンだった。アンコ型だが、すっきりした明るい風貌が良かった。十九歳六ヶ月で史上最年少の小結に昇進し、〝秩父の怪童〟と呼ばれた。今の水戸泉顔負けに高々と塩をまき、指先にちょっとつまむだけの出羽錦と好対照だった。しかし、全盛期は意外に短く、糖尿病に悩まされ番付はズルズルと下がっていった。場所が始まると、小学校から急いで帰ってくるのだが、既に取組の終わっていることが多く、最後は十両に落ちてテレビ中継に映らなくなってしまったのが歯がゆかった。

私の祖母は柏戸の贔屓だった。改めて記録を見直すと、横綱になってからの成績は八勝、九勝止まりということが多く、優勝も五回で、必ずしも良い数字を残していない。横綱も大鵬と一緒にようやく昇進出来たと陰口をきかれた。体が堅く腰高のために土俵際がもろくケガも多かった。祖母などは、ハラハラ相撲なので本番の取組を正視することが出来ず、勝負がついてからビデオテープで見ていた。

それでも柏戸は人気があった。天下無敵の大鵬と唯一互格に戦えたのは柏戸だったし、誰もが恐がった上り坂の高見山や琴桜のぶちかましを正面から受け止めることが出来たのも柏戸だけだったからだ。ガチッと受けて相手の出足を止めると、前みつを引いてそのまま〝電車道〟で持って行き、相手と重ね餅になって土俵下へ落ちる相撲は豪快だった。

○

数年前偶然に知り合った相撲好きの友人に誘われて、北の湖部屋へ稽古を見に出かけた。その友人は、就職浪人の時代、夏巡業に付いて東北・北海道を回り、当時横綱の北の湖と親しくなったという剛の者だ。

部屋は深川・清澄庭園のそば、大鵬部屋の筋向いにある。夏場所が近いゴールデンウィークの一日、外はいくらか蒸し暑いのだが、稽古場はたっぷり汗を流させるためか、窓や扉を閉めきっている。中へ入ると眼鏡が曇るほどの熱気と鬢付け油特の香り。上り座敷に親方と並んで緊張して座る。北の湖部屋は、まだ歴史が浅く、幕下が三人いるほかは三段目以下の若手ばかりの部屋である。しかも場所が間近になると、稽古は調整程度の軽いものになるという。それでも皆が砂にまみれての申し合いは、目の前で見ると迫力がある。仕上げのぶつかり稽古に胸を出す元蜂矢の小野川親方の威勢のいい声が響く。

稽古が終わると、親方と一つの鍋を囲んでチャンコを御馳走になる。花のニッパチ組の北の湖親方は、私より一つ年下だが、その道の頂点を極め、既に多くの弟子を育てているだけに貫録が違う。こちらはつい圧倒されて話題に窮してしまう。後ろには若い衆が何人も立って給仕してくれる。チャンコのうまさは格別だが、ここでも緊張する。

○

平成二年初場所千秋楽、部屋で行われた打ち上げ会で一人の若い力士が廃業した。幕下にも上がれなかったから大イチョウを結うことは出来ず、土俵の上での断髪式もない。それが今夜は夢にまで見て憧れたであろう大イチョウを許される。しかし、それは切り落とすための束の間のものなのだ。宴たけなわ、彼は大イチョウを結い、先輩に借りたものか和服の正装で席に着く。彼にとっては最初で最後の晴れがましい舞台だろう。後援者達が次々にハサミを入れ、おしまいに、親方が大たぶさを落とす。宴席の片隅、私のすぐそばに父親と婚約者が座っていた。二人はじっと下うつむいて涙をこらえている。断髪式が終わり、髪を整えてタキシード姿になった青年が後援者の間を回って父親のところへ来たとき、父は一つうなずくと、黙って彼にビールをついだ。兄弟弟子達も皆泣いている。

すっかり酔ってしまった友人を残し、一人部屋をあとにすると、フラフラ歩いて万年橋にかかる。下は小名木川の黒い川面。隅田川の向う岸の夜景がきれいだ。たった一度の大イチョウ。厳しい勝負の世界に生きる男達が、志を果たさずに去っていく仲間に送るはなむけだと思うと、改めて胸がつまる。切り落とすためだけに結った大イチョウは何よりも哀しく、また何よりも美しい。彼はこれから築地の魚河岸で働くのだという。

○

初場所やかの伊之助の白きひげ　万太郎
小鉄にも歓声の湧く浪花場所　東天紅
夏場所の土俵灯れりすでにして　万太郎
夏場所やひかへぶとんの水あさぎ　同
秋場所や退かぬ暑さの人いきれ　同
咳しつゝ万年橋を大イチョウ　文人
かじかみて取り的佇つや小名木川　同